



Data

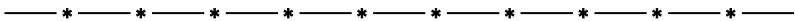
監督・脚本：日比遊一
 製作総指揮：奥山和由
 出演：浅田美代子／平岳大／木内みどり／小松政夫／古谷一行／山崎一／窪塚俊介／菜葉菜／山崎静代／小藪千豊／WORAPHOP KLAISANG／鈴木美羽／佐伯日菜子／真瀬樹里／中村有志／黒田アーサー／岡本富士太／樹木希林

👁️👁️ みどころ

弁護士生活を45年もやっていると、カネと欲を巡る事件に巡り合うことは多い。豊田商事事件はその一例だが、本作でエリカがその広告塔になった投資詐欺事件とは？

1973年に『赤い風船』でデビューした、あの愛くるしい浅田美代子が60歳を超えて「エリカ38歳」と名乗る、ケバくて厚かましい女を熱演！樹木希林がその人生の最後に世に問うた、生涯唯一の企画作品のテーマは、ズバリ「女の本性ってなんですか？」

それがわかれば、苦労はない。わからないからこそ、本作のような一例から、しっかりその勉強を・・・。



■□■浅田美代子が、みち子さんからエリカに変身！■□■

歌手・浅田美代子といえば、実に下手クソな歌唱力ながら1973年のデビュー作『赤い風船』が大ヒットし、第15回日本レコード大賞新人賞を受賞したアイドル歌手。時代は、まさに私が弁護士として活動を開始した頃だ。大ヒットしていたテレビドラマ『時間ですよ』を観る暇は全くなかったが、歌手・浅田美代子の名前とあの愛くるしいソルックスは、永遠に私の頭の中に刻まれた。

同じように、いや浅田美代子以上に日本中を沸かせたアイドル歌手が1971年に『水色の恋』でデビューした天地真理。歌のうまさでは同時期にデビューした小柳ルミ子に全然敵わないものの、「白雪姫」と呼ばれた愛くるしさは数段上。また、『赤い風船』以外にヒット曲が出なかった浅田美代子と比べても、アイドル歌手・天地真理のフィーバーぶり

は突出していた。そんな天地真理が歌手としての人気が衰えてくる中、1985年に日活ロマンポルノ『魔性の香り』に出演したことには驚いたが、浅田美代子はそういう変節(?)はせず、1994年からは『釣りバカシリーズ』でハマちゃんこと浜田伝助の愛妻みち子さん役に奮闘。『男はつらいよ』シリーズにおけるフーテンの寅さんの妹役・さくらには及ばないものの、夫との「合体!」も適当にこなし、息子にも恵まれ、ハマちゃんの格好の操縦役として長い間理想的な役割を果たしてきた。

そんな浅田美代子が本作では60歳にして38歳と詐称し、詐欺の容疑で国際指名手配された女・エリカ役で45年ぶりに主演! さあ、その変身ぶりは如何に?

■□■盟友・樹木希林が初の企画! この世の置き土産に! ■□■

2018年9月15日に75歳で逝去した女優樹木希林は、浅田がデビューしたTVドラマ「時間ですよ」で共演した時以来の盟友だ。本作は、そんな樹木希林初の「企画」による作品で、樹木から「坂本順治監督の『顔』(00)みたいな役をやったらいいのに」「美代ちゃんはこういう役やったらいいのよ」と勧められたことによって浅田が決断し、実年齢60歳を少し過ぎた2018年に本作が実現したそうだ。

樹木の最後の作品は『日日是好日』(18年)(『シネマ43』270頁)とされているが、出番は少ないものの、樹木希林は本作でもエリカの母親役で出演しているから、その不気味な存在感に注目。天地真理が日活ロマンポルノに出演したことは是非論と同じように、いくつになっても清純派のイメージの強い浅田が本作のエリカのような天下の悪女役で出演したことは是非論はあるが、樹木希林の企画力と浅田美代子の決断力に拍手を送りたい。

私はそんな興味で本作を鑑賞したが、同じような興味をもつ年配客が日本には多いようで、公開初日の土曜の館内はほぼ満席だった。これなら、亡くなった樹木希林さんもさぞ喜んでることだろう。

■□■「私も被害者の一人です」に啞然! それをどう解釈? ■□■

本作は、①発端 PROLOGUE、②監禁 IMPRISONMENT、③逃亡 ESCAPEの3部で構成されている。投資詐欺の発端は、水商売をしながらアメリカ製のサプリメントを扱うネットワークビジネスを手がけていた渡部聡子(浅田美代子)が、ある日上品な和装の女性・伊藤信子(木内みどり)と知り合うシーンからだ。聡子の営業トークを耳にして商品が気になったと話しかけてきた伊藤は、現金20万円を財布から出してサプリメント15個を買ってくれたから、誰だってこの女を信用するのは当然。そのうえ、伊藤から紹介された平澤育男(平岳大)という男の知的で魅力的な話を聞けば、聡子ならずともその話を信用するはずだ。本作は、そんな発端で平澤と肉体関係をもちながら、持ち前のチャーミングさと巧みなセールストークで人々からお金を集める役目を嬉々としてこなしていく聡子の姿をたどっていく。しかし、これを観ていると、聡子は自分がやっていることが

投資詐欺と認識していたのだろうか？

そんな疑問は、本作が①発端に入る前のエピローグとして、投資詐欺の容疑で国際指名手配され、タイで拘束された聡子が護送車に乗せられた中で、報道陣から声をかけられると、「私も被害者の一人です」と語ったことを見ればよくわかる。もちろん、その言葉には哑然だが、それをどう解釈？

■□人間模様は、弁護士45年の体験でタップリと！■□

『がんばったで！31年』『がんばったで！40年』に続いて、私は2019年4月30日に、『がんばったで！45年』を出版した。同書は、「ナニワのオッチャン弁護士 評論・コラム集」というサブタイトル通りの「評論・コラム集」だが、そこに収録した1部の「事務所だより」では弁護士活動の中での注目すべき事件等も載せている。私の弁護士活動は1974年から始まり今日まで続いているが、その前半3分の1の1974年から1989年の「昭和の時代」はまさに高度経済成長からバブルの時代。そして、1989年からの平成30年間は、「令和」を迎えるにあたってすべての新聞で総括されている通りの時代だ。とりわけ、私は破産管財人の仕事もたくさんこなしていたから、バブルに至る時代とバブルが崩壊する時代における、カネを巡る人間模様は弁護士としてたくさん見てきた。

本作の「監禁 (IMPRISONMENT)」では、金を預けたのに配当金をもらえないと訴えて聡子の自宅に押しかけてきた20名ほどの支持者たちが、ロ々に聡子を罵り、「カネを返せ！」と迫る姿が登場する。しかし、私に言わせれば、こんなことはいくらやってもムダ。平澤はもちろん、聡子も破産宣告を受ければ、それですべてお終いになるわけだ。したがって、私にはそんな風景は何の面白みもなく、何の刺激も受けなかったが、そこで印象に残ったのは、聡子に対して伊藤が語っていた「お金は人間よりはるかに頼りになります。頼りにならないのは人間の心。」。まさに、その通りだ。

また、そんな嵐のような監禁騒動が終わった後、聡子は母親と2人でボンヤリ庭を見つめながら、「お母さん、一緒に死のうか。」と口にするが、私に言わせれば、これもきつと口先だけの話。あれだけ生命力が強く、さらに平澤との男女関係が切れる否やタイに渡ってすぐにボルシェ (WORAPHOP KLAISANG) という若いタイ人の男を囲い込んだ聡子だから、そう簡単に自殺などするはずがない。そう思っていると、案の定・・・。

■□潜伏先のタイが安泰だったら、聡子は・・・？■□

本作の「発端 (PROLOGUE)」で示される投資詐欺の実態をみれば、その主犯はあくまで平澤で、聡子は単なるカネ集めのセールストークに長けた営業ウーマンに過ぎないことがよくわかる。だって、平澤が熱っぽく語る、国境を越えた大規模な慈善事業について、聡子は全くわかっていないことが明らかなのだから。もっとも、そんな難しいことがわからなくても、カネを使って贅沢を楽しむことなら聡子は得意。高級ブランド品の買い込み

は女の特性の1つだが、エステやネイルサロンを楽しむのもそれ。貧乏な少女時代を過ごし、豊かな生活に憧れた聡子にとって、平澤のビジネスの広告塔になればいくらでもカネを集められ、いくらでもカネを使えるのだから、そんな幸せなことはなかったわけだ。

しかし、そんな絶好のビジネスパートナーの関係を壊すのは女ではなく、浮気な男と相場が決まっている。聡子という絶好の広告塔がありながら、同時に支援者の1人の人妻と平澤が密会を重ねていたことを聡子が知ると・・・？

本作中盤にみる聡子とポルシェの出会いはかなり自然に近いし、事態がヤバくなってタイに逃亡した後、タイの一軒家をポルシェに買い与えて、そこで激しく愛し合う聡子の姿をみると、聡子はそれなりに幸せそうだ。すると、もし、潜伏先のタイが安泰だったら、聡子はそこでずっとポルシェと2人で幸せに・・・？

■□■女の本性ってなんですか？■□■

本作のパンフレットによれば、「樹木希林がその人生の最後に世に問うた、生涯唯一の作品」である本作のテーマは、ズバリ「女の本性ってなんですか？」パンフレットのイントロダクションには、「いけないことと気づきながら、煩惱のままに金と男に溺れる聡子の姿に、女＝人間の“業”と“本性”があぶりだされ、その姿はどこかおかしくも切ない。がむしゃらに生きる人間ならではの滑稽さとペーソス（哀愁）に満ちた犯罪エンタテイメントが誕生した。」と書かれている。

他方、パンフレットには家田荘子の『『エリカ38』が写す、人間の光と闇』と題するREVIEWがあり、その最後には「喜びと悲しみ、光と影、表と裏……誰もが大人なり小なり抱えています。でもそれが生きている証拠だと感じさせてくれる作品ではないでしょうか。」と書かれている。これは『極道の妻たち』の作者であると同時に、女性としてかなり数奇な人生を歩んできた家田荘子ならではの文章。そしてまた、彼女の文章なればこそその説得力をもっている。

「女の本性ってなんですか？」そんな質問をされて、「それは〇〇です」と答えられる男（人間）などどこにもいないはず。それがわからないからこそ、女優・樹木希林が企画し、女優・浅田美代子が主役の「エリカ38」を演じた本作は、その1つの例として多くの人々の興味を集めるわけだ。60歳を超えてそんな役に挑戦した女優・浅田美代子に再度大きな拍手を送りたい。

2019（令和元）年6月14日記